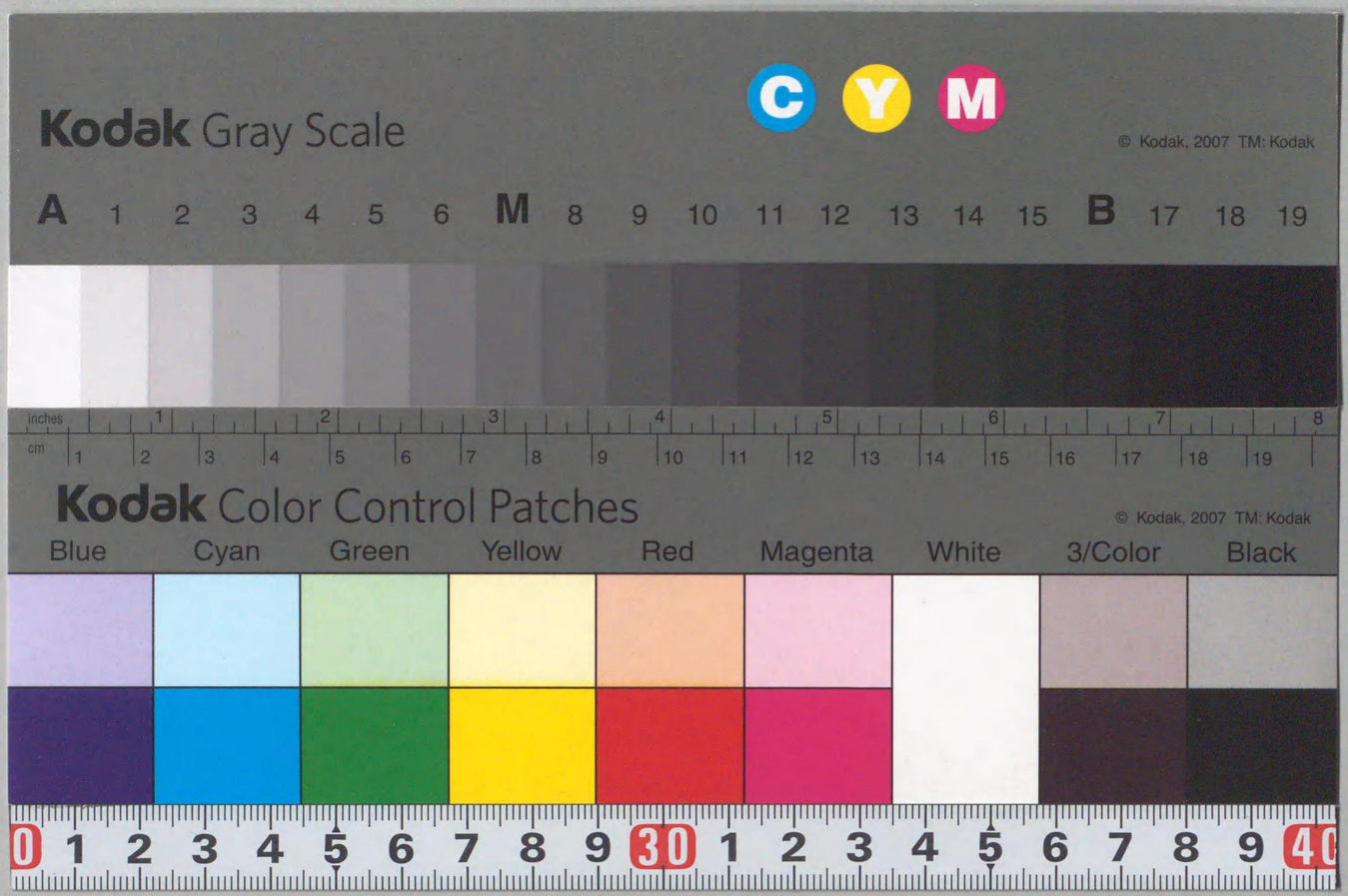
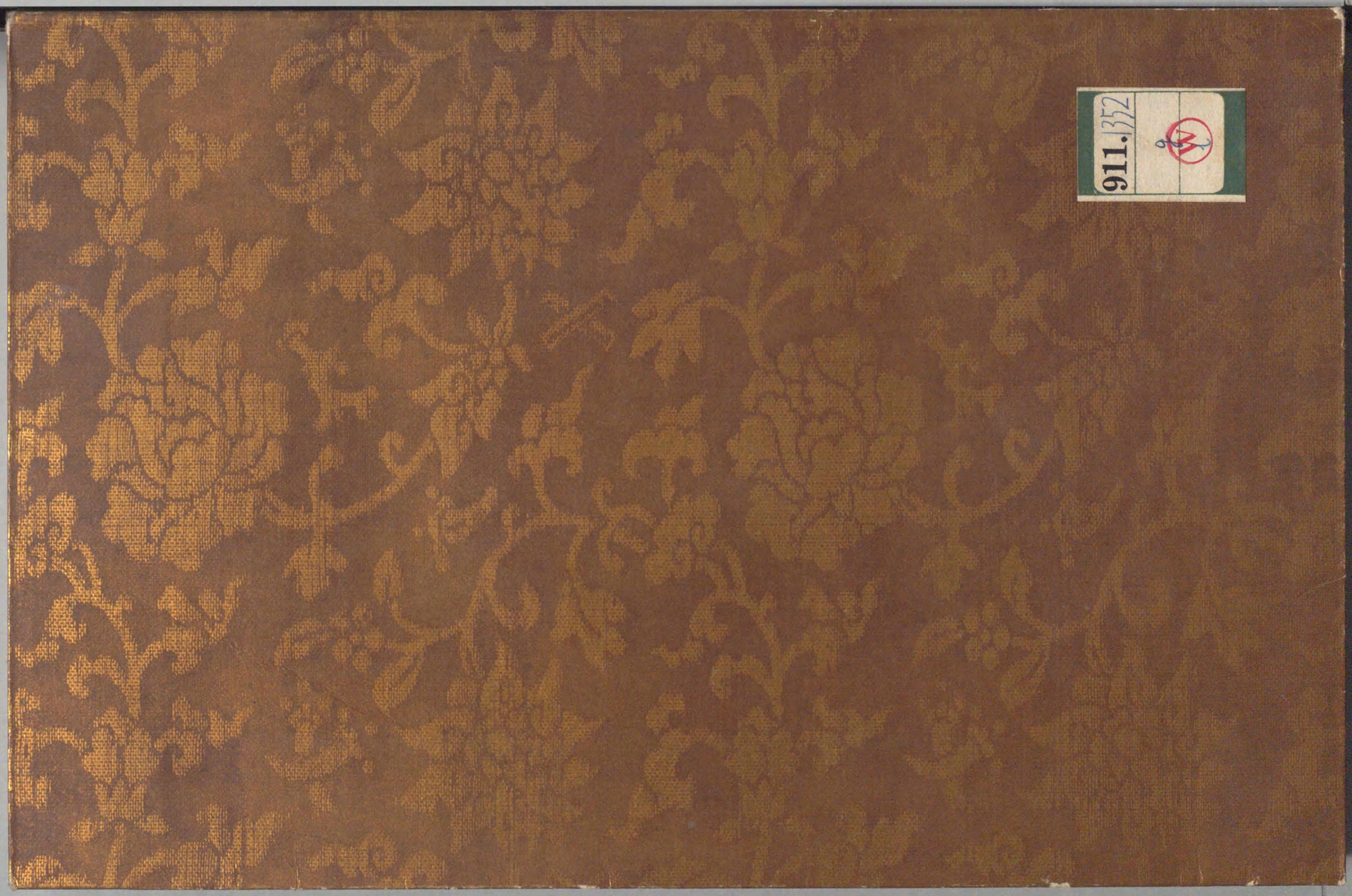

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40


911.352

国立国会
25. 10. 21
図書館

216475

國立國會圖書館藏書

拾遺和歌集巻第一

春

平さたふんか家歌合によみ侍ける　壬生忠岑

抄　春たつといふ許にやみ吉野の山もかすみてけさは見ゆらん

承平四年中宮の賀し侍ける時の屏風に　紀文幹

抄　春霞立るを見れは荒玉のとしは山よりこゆる成けり

としのはしめによみ侍ける　山邊赤人

昨日こそ年はくれしか春霞かすかの山にはやたちにけり

冷泉院東宮におはしましける時歌奉れとおほせられけれは　源重之

吉野山峯の白雪いつきえてけさはかすみの立かはるらん

延喜御時月次御屏風に　素性法師

抄　あらたまの年立かへる朝よりまたるゝ物は鶯の声

天暦御時歌合に　源順

氷たにとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬ鶯の声

題しらす　平祐挙

拾 春立て朝の原の雪見れはまたふる年の心ちこそすれ
さたふんの家哥合に
忠岑

拾 春立て猶ふる雪は梅の花さくほとなくちるかとそみる
題しらす
よみ人しらす

いつのやとれ梅にみさうしてこすれしらす山の雪けも花とこそふれ
天暦十年三月廿九日内裏哥合に
中納言朝忠 拾中務

拾 鶯の聲なかりせは雪きえぬ山さといかて春をしらまし
[illegible]
大伴家持

万 うちきらし雪はふりつゝしかすかにわか家のそのに鶯そなく
題しらす
柿本人麿

古今 万 梅の花それともみえすひさかたのあまきる雪のなへてふれゝは
延喜御時宣旨にて奉れる哥の中に
つらゆき

梅かえにふりかゝりてそ白雪の花のたよりにをらるへらなる
同御時御屏風に
忠岑

ふる雪に色はまかひぬ梅の花かにこそにたる物なかりけれ
冷泉院御屏風のゑに梅花ある家にまらうときたる
所
平兼盛

〔か〕わかやとの梅のたちえやみえつらむおもひのほかに君かきませる

斎院御屏風に　みつね

〔か〕かをとめてたれおらさらむ梅の花あやなしかすみたちなかくしそ

もとうれにとみ侍る前斎院屏風に　つらゆき

〔か〕白妙のいもか衣に梅の花いろをもかをもわきそかねつる

題しらす　人丸

あすからはわかなつまむとかたをかのあしたの原はけふそやくめる

恒佐右大臣の家の屏風に　つらゆき

〔か〕野へみれはわかなつみけりむへしこそかきねの草も春めきにけれ

わかなおほくもちて侍りて　円融院御製

〔新勅〕かすかのにおほくのとしはつみつれとおいせぬものはわかなゝりけり

題しらす　大伴家持

〔万〕春の野にあさるきゝすのつまこひにをのかありかを人にしれつゝ

ませきさいの宮に宮内といふ人のめのとはへりける時に女

のちにかれたる人にまかりてあひけるにねのひにおくり侍りける　五条

かくれなきものはねのひの日はいかにおもふらん

〔か〕松の人にゆかなく音にきくをりのかすは日とひとへのこともなれ

題しらす　たゝみね

子日する野へに小松のありかせは千年のためしに何をひかまし
入道式部卿のみこの子日し侍ける所に
大中臣よしのふ
ちとせまてかきれる松もけふよりは君にひかれて万代やへん
延喜御時御屏風に水のほとりに梅花さける所
つらゆき
梅花またちらねとも行水の底にうつれるかけそみえける
題しらす　読人しらす
川ミむあつとれの若花ハ當れつゝ立する野へのわかなつまなん
拾抄
梅花よそなからミむわきもこかとかむはかりのかにもこそしめ
五
袖たれていさわかそのにうくひすのこつたひちらす梅の花ミむ
兵部卿元良親王
あさまたきおきてそミつる梅の花よのまの風のうしろめたさに
ミつね
吹風をなにいとひけん梅花ちりくる時そかハまさりける
大中臣能宣
匂をハ風にそふとも梅花色さへあやなあたにちらすな
よみ人志らす
ときしもあれハ風のよするにまかせても柳のいとハ中にみたれぬるかな
屏風に
大中臣能宣

216475

ちりて後をもゆかしきにおもひやれかけてうつみる人のおもひ

題しらす　　凡河内躬恒

ちる梅の花田のいとを縁もとめはきてなかくの当の色

よみ人しらす

花になれていく度も柳の糸のたえぬ成人の身

子の日のまつをひきそへて帰るこそ東山にのこすなりけれ

中務

さけはちるさかねはこひし山桜思ひたえせぬ花のうへかな

題しらす

吉野山たえす霞のたなひくは人にしられぬ花やさくらん

天暦九年内裏哥合に

よみ人しらす

さくら花さかりになりて見ゆるもの山桜あかねの雲たちなかくしそ

題しらす

吹風にあらそひかねてあしひきの山の桜はちりにけりなも

菅家万葉集中

浅緑野辺の霞はつゝめともこほれてにほふ花さくらかな

題しらす　　読人しらす

吉野山きえせぬ雪とみえつるは峯つゝきさく桜なりけり

天暦御時麗景殿女御と中将更衣と哥合し侍

寛和歌合に

清原元輔

春霞たちなへたてそ花さかり見てたにあかぬ山のさくらを

さたふんの家の歌合に

たゝみね

春はなほ我にてしりぬ花さかり心のとけき人はあらしな

賀の御屏風に

藤原千頴

さきそめていく世へぬらん桜花色をは人にあかすみせつゝ

天暦御時屏風

たゝみ

春くれはまつ川そてちらさえいかれ神代つゝしもとしき山田なれとも

題しらす

在原元方

まかくれは山田のかはつさけて人の心てよりものよるらむ

承平四年中宮の賀し給ける時の屏風に

斎宮内侍

春の田を人にまかせて我はたゞ花に心をつくるころかな

宰相中将敦忠朝臣家屏風に

つらゆき

あたなれとさくらのみこそふるさとのむかしなからの物にはありけれ

斎院屏風に山みちゆく人あるところ

伊勢

ちりちらすきかまほしきをふるさとの花見てかへる人もあはなん

題しらす　　読人しらす

さくらかりあめはふりきぬおなしくはぬるとも花のかけにかくれん

もとすけ

み人もあらしと思ふ山さとに花のさかりをたれかみるらん

円融院御時三尺御屏風に

平兼盛

花の木をうへしもしるく春くれはわかやとすきてゆく人そなき

題しらす

よみ人しらす

さくら色にわか身はふかくなりぬらん心にしめて花をおしめは

権中納言義懐家のさくらの花おしむ心よみ侍りけるに

藤原長能

身にかへてあやなく花をおしむかないけらはのちの春もこそあれ

題しらす

読人しらす

みまくほしみおもふ花のさかりに桜唐なかりけるさくら花やこゝに見し

ふれとも霞たにかくしはてぬは山さくらかな

天暦御時御屏風に

藤原清正

ちりぬへき花みる時はすかのねのなかき春日もみしかゝりけり

題しらす

よみ人しらす

いさやこゝろにもらさてちらぬまにさくらはいつまても人のおしみをかせん

屏風に　　よしのふ

サ
ちりもせし物ともみましてこの春やよひのすゑもいはなし

題しらす　読人しらす

見もはてゝゆくと思へはちる花につけて心のそらになる哉

延喜御時ふちつほの女御哥合のうた

サ
あさなにはわかまつくやまれにはきてちるかとてもよはれてん

あれはてゝ人も侍らさりける家にさくらのさきみたれて侍るをみて　恵慶法師

サ
あさちはらぬしなき宿のさくら花心やすくや風にちるらん

きぬの宮のもきの屏風に　つらゆき

サ
春ふかくなりぬと思ふをさくら花ちるこのもとはまた雪そふる

亭子院哥合に

サ
さくらちるこの下風はさむからて空にしられぬ雪そふりける

題しらす　よみ人しらす

サ
あしひきの山ちにちれるさくら花きえせぬ春の雪かとそ見る

天暦御時哥合に　少貳命婦

サ
葦引の山かくれなるさくら花ちりのこれりと風にしらるな

題しらす　読人しらす

蘢上
いもかすむ里の春くる花はちりはしめても花のさかりを

天暦御時歌合に　源したかふ
春ふかみゐてのかは浪たちかへりみてこそゆかめ山ふきの花
井てといふ所に山吹の花のおもしろくさきたるを見て　恵慶法師
山吹の花のさかりに井てにきてこのさと人になりぬへきかな
屏風に　元すけ
物もいはてなかめてそふる山吹の花に心そうつろひぬらん
題しらす　よみ人しらす
さはみつにかはつなくなり山吹のうつろふかけやそこにみゆらん
わかやとのやへ山吹はひとへたにちりのこらなん春のかたみに

亭子院歌合に　坂上是則
花の色はうつしとゝめよ鏡山春よりのちのかけやみゆると
題しらす　よみ人しらす
春霞立わかれ行山みちは花こそぬさとちりまかひけれ
年のうちはみなはるなからくれなゝむ花見てたにもうきよすくさん
延喜御時春宮の御屏風に　つらゆき
風ふけは方もさためすちる花をいつかたへゆく春とかはみむ
おなし御時月次御屏風に
花もみなちりぬるやとはゆく春のふるさととこそなりぬへらなれ

閏三月侍けるつこもりに　　元輔

つねよりものとけかりつるはるなれとけふのくるゝはあかすもあるかな

拾遺和歌集巻第二

夏

天暦御時の哥合に　　大中臣能宣

なくこゑはまたきかねともせみのはのうすきころもはたちそきてける

屏風に　　したかふ

わかやとのかきねやはるをへたつらん夏きにけりとみゆる卯の花

冷泉院東宮におはしましける時百首哥たてまつれとおほせられけれは　　源重之

はなの色にそめしたもとのおしけれは衣かへうきけふにもあるかな

夏のはしめによみ侍ける

少
[illegible]物かは夜衣なつ川やなきさ[illegible]

盛明のみこ

新上
夏にこそさきかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな

百首哥中に

志けゆき

円融院御時御屏風哥

平かねもり

住吉の岸のふちなみわかやとの松のこすゑにいろはまさらし

志たかふ

紫のふちさく松のこすゑにはもとのみとりもみえすそありける

延喜御時飛香舎にて藤花宴侍ける時に

小野宮太政大臣

新上
[illegible]てさける藤なみに[illegible]

題しらす

躬恒

手もふれてをしむかひなく藤の花そこにうつれは浪そをりける

たこのうらにて藤花を見て

柿本人丸

万
たこの浦のそこさへにほふ藤浪をかさしてゆかん見ぬ人のため

山里の卯花に[illegible]

平[illegible]誠

少
わかやとの[illegible]梅にさきてや夏の[illegible]

題しらず　　よみ人しらす

卯花のさけるかきねはみちのくのまかきの島の浪かとそみる

延喜御時月次御屏風に　　つらゆき

神まつる卯月にさける卯花はしろくもきねかしらけたるかな

うみまいろやされ卯花白妙なれとそくるうとておやまてれける

題しらす　　よみ人しらす

山かつのかきねにさけるうの花は誰か白妙の衣かけしそ

時わかすふれる雪かとみるまてにかきねもたわにさける卯花

春のきてきつゝしもそへて思ひつゝ山かきにとろくなるらん

わすれつゝこれきつゝの宿かりしさにし郭公やすらふかきも浦川歌

夜山をこゆとて　　久米広縄

家にきてなにをかたらむあしひきの山郭公ひとこゑもかな

延喜御時御屏風に　　つらゆき

山さとにしる人もかな郭公なきぬときかはつけにくるかに

題しらす　　よみ人しらす

やまさとにやとらさりせは郭公きく人もなきねをやなかまし

天暦御時哥合に　　坂上望城

髣髴に花鳴渡なりかたくきたら山ほはいりかけきえぬるゑ

サ
あやまりてこ秋もやまかはる秋の暁みすてゝかれきこゆる

寛和二年内裏歌合に

平兼盛

サ
あやし人秋てふつるや秋はいまする山はかすみて川もかれ

女宮のところの家の歌合に

右大将道綱母

サ
山川と人はいへともかくきえにしなかれもいつはかはれもかくれ

坂上是則

天暦御時の歌合に

壬生忠見

サ
さ夜ふけてねぬるをたにしかりけり人はいひてふつそきくへりかれ

おなじ御時の御屏風に

伴勢

坂撰
小塩山をきくといふ小秋の夜深くみえし沸川の影

女宮の御屏風に

源公忠朝臣

サ
いやしてうちくもりし秋の今はとてかれきの流かりけた

敦忠朝臣の家屏風に

つらゆき

サ
おなしくはいかなる人のしるへかせて山かけきえて流きくらん

延喜御時哥合に　よみ人しらず

さみだれはちかくなるらしよど河のあやめの草もみくさおひにけり

屏風に　大中臣能宣

サ 昔まてしも花にかけしあやめ草わかやかれ河をとみるかな

題しらず　よみ人しらず

けふみれは玉のうてなもなかりけりあやめの草のいほりのみして

延喜御製

サ 葦引の山郭公けふとてやあやめの草のねにたてゝなく

サ [illegible]の袖に思ひよそへてほとゝきす花たちはなのかをたつぬらん

天暦御時御屏風によみ侍りける人のまつる所

壬生忠見

サ い河のせになきてゆくも秋[illegible]

[illegible]

小野宮大臣家屏風に夏はてたる所に秋[illegible]

まつのたおれるに　つらゆき

サ いかなれは[illegible]やこ[illegible]秋[illegible]ちかしと人のまつらん

[illegible]の家の哥合に　元輔

[illegible]

題しらず　よみ人しらず

なにや[illegible]田上山の秋風この[illegible]

少 [illegible]

[illegible]秋風[illegible]

大伴坂上郎女

万 秋風は[illegible]

中務

夜萩の[illegible]

[illegible]の萩は浦鳴の[illegible]

延喜御時中宮歌合に

よみ人しらず

夜[illegible]山の[illegible]

春宮にさぶらひ[illegible]山に秋風[illegible]

[illegible]所

藤原実方朝臣

サ [illegible]やみ[illegible]山の秋風[illegible]

題しらず

読人しらず

百 サ 秋風[illegible]

西宮左大臣の家の屏風に

源順

ミ サ [illegible]松[illegible]人[illegible]山[illegible]萩[illegible]

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

さ月山このしたやみにともす火は志かのたちとの志るへなりけり

九条右大臣家の賀の屏風に

平兼盛

あやしくも志かのたちとのみえぬかなをくらの山にわれやきぬらん

女四のみこの家の屏風に

たゝみね

ゆくすゑハまたとをけれと夏山のこの志たかけそたちうかりける

延喜御時の屏風に

つらゆき

夏山のかけをしけみやたまほこのみちゆき人もたちとまるらん

河原の院のいつみのもとにすゝみ侍て

恵慶法師

松かけのいはゐの水をむすひあけて夏なきとしとおもひける哉

家にさきて侍けるなてしこを人のかりつかはしける

伊勢

いつこにもさきはすらめとわかやとの山となてしこたれにみせまし

題しらす

よみ人しらす

そこきよみなかるゝ河のさやけくてはらふることは神もきくらん

藤原長能

さはへなすあらふる神もをしなへてけふはなこしの祓なりけり

秋

読人しらず

依けるに　恵慶法師
やへむくらしけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり
題しらす　安貴王
万 少 秋たちていくかもあらねとこのねぬるあさけの風はたもとすゝしも
延喜御時屏風に　云河祓
はらへつるかはせにまてなかれにし秋風の我衣手をやれ人かなしき　つらゆき
秋風の夜のふけゆけは天の河かはせに浪のたちゐこそまて
題しらす　柿本人まろ
万 あまの川とをきわたりにあらねとも君かふなてはとしにこそまて
[illegible]
よみ人しらす
さ夜ふけてあまのかはとにたちてみる思ひはあまの宮やまとそ
湯原王
万 少 ひこほしの思ひますらんことよりもみる我くるし夜のふけゆけは
人まろ
万 少 年にありてひと夜いもにあふひこほしも我にまさりて思ふらんやは
延喜御時月次御屏風に　つらゆき
少 たなはたにぬきてかしつるから衣いとゝ涙に袖やぬるらん

侍けるに　　　　恵慶法師

やへむくらしけれるやとのさひしきに人こそみえね秋はきにけり

題しらす　　　　安貴王

秋たちていくかもあらねとこのねぬるあさけの風はたもとすゝしも

延喜御時屏風に　　　貫之

ふしかれ川まて流れし秋風に我そおやれ人をまつかな

川しまはし紀

秋風に夜のふけゆけは天の河かはせに浪のたちゐこそまて

題しらす　　　　柿本人まろ

あまの河とほきわたりはなけれとも君か舟出は年にこそまて

天河こそのわたりはうつろへはあさせふむまに夜そふけにける

よみ人しらす

さ夜ふけてあまの河らのそにてかへる思ひ渡(?)あやなきる

湯原王

ひこほしの思ますらむ心より見る我くるし夜のふけゆけは

人まろ

年にありてひと夜妹にあふひこほしも我にまさりて思ふらんやは

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

たなはたにぬきてかしつる唐衣いとゝ涙に袖やぬるらん

右衛門督清蔭[源]家の屏風に

ことゝをはかにしと秋と思へともまよしけるれけふこそ秋の限りなりけれ

左衛門督藤原懐平家屏風に

恵慶法師

いかへしくふにたくひ月はさしけれとまれかに秋のよを思ふまゝには

七夕庚申にあたりて侍りける年

もとすけ

いにしへもはなれてしも思ひける今宵にあひてあかすなる哉

題しらす

よみ人しらす

あひみても猶あかすなる天の川かはへに出てまけの柿へき

かりにのみとふ人ゆゑに秋の野に我もふしてそはなの名をたて

君こそは見にゆかねともをみなへしやとりのさきにかけてこそみれ

女郎花をほりうゑし野辺に花と紀の川のほとりにて読みはへりける

宇毛なくてしも心なく女郎花をるへき君やわすれかねつる

とみなへしにほひける家にてよみ侍りける

よしのぶ

女郎花にほふあたりにむつるれはあやなく露や心おくらん

題しらす

よみ人しらす

白露はよくいけものにおきてゐる女郎花あまたあまるは人なけれはそ

嵯峨野にをしきいたるほとにまかりて

藤原長能

ひくらしに見まくもほしき女郎花野邊にやこよひ旅ねしなまし

八月まつのもとにゐてまれて思ふ所寄よみ侍けるに

恵慶法師

萩のはもやゝうつろふ花よく植たるになかまかれたるらん

齋院屏風に

よみ人しらず

をりてみてへのまゝにや秋の野の花にかれゝはよそにくれへし

題しらす

秋の野の花の名たてに女郎花かりにのみこん人にをらるな

貫之

うゑてみて我はきこえて女郎花こゝろにかけてはるかなりけり

陽成院御屏風にこなたかしこなる所

をりふしに人の見ゆきは女郎花ましのなき花けおもかさ

亭子院のにはに人々前栽うゑさせ給てこれかれによませ給けるに

伊勢

栽なまてゝ君のしらなは花すれは玉とみてや露もをくらん

題しらす

読人しらす

さてまくに秋はありしかともいかにもれきくたえしとさすかしはな

少将に侍ける時こゝろもの人にさまりつかはして

大貳高遠

相坂乃関のいはかとふみならし山たちいつるきりはらの駒

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

あふさかの関の志みつにかけみえていまやひくらんもち月のこま

屏風に八月十五夜池ある家に人あそひたる所

源したかふ

水のおもにてる月浪をかそふれハこよひそ秋のもなかなりける

水に月のやとりて侍るを

よしのふ

秋の月浪の底にそいてにけるまつらん山のかひやなからん

廉義公の家のみさうしに秋の月をなかむる池ある家ある所

源景明 右京門

あきの月為にあらはとみて川らハ小ふねも月夜ハのけにそありける(?)

円融院御時八月十五夜かけある所に

もとすけ

あのもれたにかゝりてむくらそいつるとみそハみゆ秋の夜の月(?)

延喜御時八月十五夜蔵人所のをのこともめしてあそひ侍けるに

藤原経臣

もゝしきにかはりにけるやこの秋の月雲のうへへつねにすめるよ(?)

おなし御時御屏風に

いつこにかこよひの月のみえさらんあかぬは人の心なりけれ

元輔

題しらす

よみ人しらす

終夜見てをあかさむ秋の月こよひの空にくもなからなん

廣義三家にて菊しるしけれはよみ侍ける

藤原為頼

おほ川のふしいかはこそ流るれ色ねをとなす川は菊の露やさむらん

前栽にすゝむしをはなち侍て

伊勢

いつこにも草の枕をすゝむしはこゝを旅とも思はさらなん

屏風に

つらゆき

秋くれははたおるむしのあるなへに唐錦にもみゆる野辺かな

題しらす

読人しらす

蟋蟀なくやとも[illegible]秋のくるゝに人まれなりて[illegible]のあさちふ

元輔

露しけくて山の衣手はぬれぬとも折てをみむ秋はきにけれ

亭子院御屏風に

伊勢

いろもむしおとろに情る秋萩はちれは許しとそいはれ

三条のきさいの宮の裳着侍ける屏風に九月九日所

もとすけ

わかやとの菊の白露けふことにいく世つもりて淵となるらん

題しらす　元輔

長月のしものみをにはいしにも菊のいろそふしるくかはりぬる哉

右大将定国家屏風に　たゝみね

千鳥なくさほの河きりたちぬらし山のこのはもいろまさりゆく

延喜御時御屏風に　つらゆき

風さむみ我か唐衣うつ時そ萩の下葉も色まさりける

三百六十首歌の中に　曽祢好忠

秋なれはこのもかのもの山錦あれはしらぬ葉りそて色かはるらん

題しらす　大中臣能宣

紅葉せぬときはの山はふく風のをとにや秋をきゝわたるらん

もみちせぬときはの山にすむしかはをのれなきてや秋をしるらん

よみ人しらす

秋風の打吹ことに高砂のをのへのしかのなかぬ日そなき

あきのゝを錦のこともしく捨しもときのく錦すとまれくあめん

もみちを入ましてわたるみちに佐保の山のはゝそのもみち

やさかてあしあかきてもちらてもみちていろかはる

恵慶法師

紅葉見る人にやとれる我としらねはやさほのかはきりたちかくすらん

題しらす　　　読人しらす

もみちはの色をしそへてなかるれはあさくもみえす山河のみつ

大井河みへくもりて舟よみ侘ぬるかな

よしみね

もみちはゝちるにまれしくれねともとて山の名にたてし

題しらす　　　よみ人しらす

秋きぬれはあさゆく比か小倉山ちるはもみちの錦とそ見つ

大井河にもみちはなかれて錦そて

健守法師

秋のおやまに紅葉の錦つきはつゝ河せに浪のたつかさそきし

西宮の左大臣家の屏風にしるされたる山こえに河ある所に

秋くしあふる女とも紅葉なかむる所に

志たかふ

名越きくはむつましき山のかたに秋は紅葉をちるとおもわ

東山にもみち見にまかりてまたの日のつとめてまかりかへるとて

秋そとよみ侍る

恵慶法師

昨日よりもちよにあきれてもみちはのあとさへ見えすさそやみるらん

天暦御時殿上のをのこも紅葉見に大井河にまかる

ひろに

源延光朝臣　大納言

もみちはゝ残たをかにぬれてこそあらしの風のいかもしるかな

源恵光　先祖不見人 大宰少輔景明父

枝ならてこそうつろふ人のみちゆくかたもかはにちりもしらまし

題しらす　小野好古

河霧のふもとをこめて立ぬれはそらにそ秋の山はみえける

ちくものゝふにまよひて帰る時はみちもわかれぬ水にけり

題しらす　法橋観教

あらしふく秋の山へをうちすきてかきちらしけるからの錦とそみる

二条右大臣の粟田の山さとに障子の絵にたひ人

もみちちるみちにやとりをする所

恵慶法師

今ははやみちれぬゆくにやとりをしむかし桜のかけもとゝめて

題しらす　よみ人しらす

よゝ今よ今はあらしの山風に人まつ虫の声のかなしき　紀

延喜御時中宮の御屏風に

つらゆき

ちりぬへき山のもみちを秋霧のやすくもみせす立かくすらん

題しらす　僧正遍昭

秋山のあらしの声をきく時はこのはならねと物そかなしき

つらゆき

秋の夜に雨ときこえてふる物は風にしたかふもみちなりけり

やてらしなはなそおしのくるなもゝのみちに風も吹し

嵐乃山のもとを行けるにもみちのいたくちり侍りけれは
右衛門督公任

あさまたきあらしの山のさむけれは紅葉のにしききぬ人そなき

題しらす　よしたゝ

秋霧の峯にもをにも立山はもみちの錦たゝまくもをし

大井河に紅葉のなかるゝを見て
壬生忠岑

色〳〵のこのはなかるゝ大井河しもは桂のもみちとや見ん

題しらす　よしのふ

みねくらて立もとゝめぬ秋風にあまれるてのたまきちれ

くれの秋重之かせうそこして侍りけるかへことに
平兼盛

暮てゆく秋のかたみにをく物はわかもとゆひの志もにそありける

拾遺和歌集巻第四

冬

延喜御時内侍のかみの賀の屏風に　　紀貫之

あしひきの山かきくもりしくるれと紅葉はいとゝてりまさりけり

寛和二年清涼殿のみさうしにあしろかける所　　よみ人しらす

網代木にかけつゝ洗ふ唐錦ひをへてよるもみちなりけり

時雨侍りける日　　つらゆき

かきくらししくるゝ空をなかめつゝ思ひこそやれ神なひのもり

題しらす　　よみ人しらす

神な月時雨ふりしくもみちはのするにねにしかに鹿鳴なるを

奈良のみかと龍田河に紅葉御覧しにみゆきありける時御ともにつかうまつりて　　柿本人麿

龍田河のもみちはなかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし

ちりのこりたるもみちを見侍て　　僧正遍昭

唐錦枝にひとむらのこれるは秋のかたみをたゝぬなりけり

延喜御時女四のみこの家の屏風に

つらゆき
流くれはもみち葉見れは唐錦滝のいとてをれるなりけり
屏風に　平兼盛
河なみの人いくたひもわたるらん人はもみちを散らさて袖のをやらん
百首歌中に　源重之
おほかたのくれてもみしはいけのけふはやまのもみちはちるらん
題しらす　つらゆき
思ねはゆふくれまては冬の夜の風にもみちはなくなりにけり
よみ人しらす
ふねをむなしく人にもあらはなみちをもいさよひのまゝにわたらん
紅葉ゝもをはすてさけはしくれけるやましくもなき秋の錦を
水こえしあきのやまもりのしもさそにあきもふかきのゆふくれ
紅葉ゝもみねはえてさけはしたもとすくるもみち葉の露霜やとく
きさいのみやの家の歌合に
霜のたてにつゆのぬきこそよはからし山の錦は織れはかつちる
題しらす　右衛門督公任
しほくさのねの袖なきにさそふの秋の紅葉はかけし錦たにかはらぬえやれ
なからも見し山の錦まて
池水やこゝろもとくやさそひあかりもみち葉のくるれなくなりにけり
紀友則

さえわたるよはの風さむければ池の氷ぞさえまさるらん
よみ人志らず
水のうへにうきねをしつる冬の夜の氷は袖の上にありける
屏風に　平兼盛
おほゐ川こほりしよりぞ渡りけるまさにとけんことぞかなしき
題しらず　よみ人しらず
冬さむみこほらぬ水はなけれども吉野の滝はたゆる世もなし
恒徳公家の屏風に　よしのぶ
冬きれは嵐の声も高砂の松につけてぞきくへかりける
高砂の松にすむ鶴冬くれは尾上の霜やおきまさるらん
もとすけ
題しらず　紀とものり
ゆふされは佐保の河原の河霧に友まどはせる千鳥なくなり
人丸
浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞ見る
廉義公家障子　もとすけ
冬の夜の池の氷のさやけきは月の光のみかくなりけり
題しらず　よみ人しらず
冬の池のうへは氷にとぢられていかでか月のそこにいるらん

月をみてよめる　　恵慶法師

サ あまのはらそらさへさえやわたるらん氷とみゆる冬の夜の月

はつ雪をよめる　　源景明

サ 宮こにてめつらしとみるはつ雪はよしのゝ山にふりやしぬらん

女とものなすらへに侍ける年の暮になん侍けれと
ゆきとく侍けるに雪のふり侍けるに　　もとすけ

ミ よねつかもいのくらゐのあをも雪のふりやましくもちらさくらく

山あ井に雪のふりかゝりて侍けるに　　伊勢

サ あしひきの山井にふれる白雪はすれる衣のこゝちこそすれ

斎院の屏風に　　つらゆき

よるならは月とそみましわかやとの庭しろたへにふれるしらゆき

題しらす　　よみ人しらす

わかやとの雪につけてそふるさとのよしのゝ山はおもひやらるゝ

屏風のゑにしかの山こえて侍る所に　　藤原佐忠朝臣 従四位上右中弁 或説補弁者

ミ 我ひとりしれし山ちにこえつるも雪にふみそめしあとそのこれる

題しらす　　たゝみ

サ 年ふれはこしの白山おいにけりおほくの冬の雪つもりつゝ

入道摂政の家の屏風に

かねもり

見わたせハ松の葉しろきよしの山いくよつもれる雪にかあるらん

題しらす　人丸

山さとハ雪ふりつミて道もなしけふこん人をあはれとハ見ん

おしなへて山ちもしろくなりにけり枝にも葉にも雪のかゝれハ

右大将実国家の屏風に

つらゆき

白雪のふりしく時ハみよしのゝ山した風に花そちりける

冷泉院御時御屏風に

かねもり

人しれす春をこそまてはらふへき人なき宿にふれるしら雪

屏風に

よしのふ

あらたまの年去年ちりくる花をハ山のあらしの年の雪なる

右衛門督公任

梅かえにふりつむ雪ハひとゝせにふたゝひさける花かとそみる

屏風の絵に佛名の所

よしのふ

おきあかす霜とゝもにやけさハみな冬の夜ふかき罪もけぬらん

延喜御時の屏風に

つらゆき

年の内につもれる罪はかきくらしふる白雪とともにきえなん

屏風の絵に佛名のあしたに梅の木のもとに道師
とあるじとかはらけとりてわかれおしみたる所

よしのぶ

雪ふかき山ぢになにかかへるらん春まつ花のかげにとまらで

屏風の絵に佛名の所

かねもり

人はいさおもひやすらむ冬くればとしのみつもる雪とこそみれ

斎院の屏風に十二月つごもりの夜

かぞふれば我身につもる年月をおくりむかふとなにいそぐらん

百首歌中に　源重之

紀つもぬれとみえしとしはふるもしてきえぬすきくもれき

拾遺和歌集巻第五

賀

天暦御時斎宮くたり侍りける時の長奉送使にて侍り
まへ人々読るとて

中納言朝忠

よろつ代のはしめとけふをいのりおきて今ゆくすゑは神そしるらん

平野祭に男使立てし時うたふへき歌
よませしに

大中臣能宣

ちはやふる平野の松の枝しけみ千世もやちよも色はかはらし

仁和の御時大嘗会の哥

よみ人しらす

うゐ山のさまもれと山にもいはれ千世は君かみよにそなるへき

贈皇后宮の御うふやの七夜に兵部卿致平
親王のきしのかたをつくりてその足にゆひつけて
侍ける

清原元輔

あさ日さすみねのつゝきのめくみにはかはりて千世はきこえけるかな

藤原のうふやにまかりて

よしのふ

ふたはよりたのもしき哉かすか山木たかき松のたねそと思へは

うふやの七夜にまかりて

君かへむやほよろつ代をかそふれはかつかつけふそなぬかなりける

右大将藤原實資かうふやの七夜に

平兼盛

おさしとれし松にちきねにたもとしはなれこそはしめと思へれ

あまた人のうけやはさりけるて

よしよ

千世ともしらぬうちに世に限なき方と人もいふへく

藤原誠信元服し侍りける夜よみ侍りける

源したかふ

老ぬれはおなしことこそせられけれきみは千代ませきみは千代ませ

このよしれ七十あまりのかうよみまし侍りける時

ゆくすゑもつきせぬ川のなかれにはいろのこしをおもひなる思

天暦のみかと四十になりおはしましける時山しなてらに金泥壽命經四十巻をかき供養しまつりて御巻数つるにくはせて州はまにたてたりけり そのすはまのしき物にあまたの歌をあしてにかける中に

山しなの山のいはねに松をうゑてときはかきはにいのりつるかな

仲算法師

聲たかくみかさの山そよはふなるあめのしたこそたのしかるらし

承平四年中宮の賀し侍りける時の屏風に

色かへぬ松と竹との末の世をいつれ久しと君のみそ見ん

斎宮内侍

おなし賀に竹の杖つくりて侍けるに

大中臣頼基

ひとふしに千世をこめたる杖なれはつくともつきし君かよはひは

清慎公五十賀し侍りける時の屏風に

もとすけ

君の世はあまの羽衣まれにきてなつともつきぬいはほならなん

あをやきの緑の糸をくりかへしいくらはかりの春をへぬらん

これもおなし

わかやとにさけるさくらの花さかり千とせみるともあかしとそ思ふ

おなし人の七十賀し侍けるに竹の杖つくりて

よしのふ

君かためけふきる竹の杖なれはまたつきもせぬ世ゝそこもれる

位山峯まてつける杖なれといまよろつ世のさかのためなり

一条摂政中将に侍りける時父大臣の五十賀し侍ける屏風に

小野好古朝臣

吹風によその紅葉はちりくれと君かときはのかけそのとけき

権中納言敦忠母の賀し侍りけるに

源公忠朝臣

よろつ世も猶こそあかね君かためおもふ心のかきりなけれは

五条の内侍のかみの賀民部卿清貫し侍りける時屏風に

伊勢

おほそらにむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなるかな

春の野のわかなならねと君かためとしのかすをもつまんとそ思

天徳二年内裏にての宴をせさせ給ひけるに

九条右大臣

きくてたに今朝のあしたにありてちとせをぬきとゝめなむ

題しらず

よみ人しらず

ゐ川ミつちよをかさねてすむとくすへし川のなかれの末にあくへし

亭子院哥合に

みつね

みちとせになるてふもゝのことしより花さく春にあひにけるかな

康保三年内裏にて子日せさせ給ひけるに

きみにこそ和哥川のうへ流れけるに

藤原のふつね

ちとせまてかきれる松もけふよりは君にひかれてよろつよやへむ

小野宮太政大臣家にて子日し侍りけるに下らうに侍りける時よみ侍りける

三条太政大臣　廉義公

ゆくすゑも子日の松のためしには君かちとせをひかむとそ思ふ

延喜御時屏風に　つらゆき

松をのみときはと思ふに世とともにながるる泉もみどりなりけり

題しらず　よみ人しらず

〇れしけのあまたれもしへすへは千世のいちりねさしゐある

承平四年中宮の賀し侍りける屏風に　参議伊衡

ふしして思ひおきてかぞふるやよろづ代は神ぞしるらんわが君のため

天暦御時前栽あはせ侍りける時　小野宮太政大臣

よろづ代にのけしき君が宿のなれ川すゑは秋の宮のみぞしらん

廉義公家にて人々に歌よませ侍りけるにくさむらの夜の虫といふ題を　平兼盛

ちとせとぞ草むらごとにきこゆなるこや松虫のこゑにはあるらん

右大臣源のひかるの家に前栽あはせし侍りける歌よませ侍りけるにすまちもちとせをかみのしらしめ侍りけるに
れのなかくまで侍るよし歌を侍りける　つらゆき

君の年ぬへてのちのちとせもまた千代のくさむらかぜに〇〇

天暦御時清慎公御もとに、まつてよろこびしはて歌を

拾遺和歌集巻第六

別

春よりの人の国へまかりけるに、あふさかの関にいてあからさまにまかりてともろともに侍りける人のよみ侍ける

よみ人しらず

春霞たつの流れはてなしとも心ありて雁にもありもねつらむ

題しらず

さくら花露にぬれたるかほ見れはなきてわかれし人そこひしき

ちる花はみてねよとてすいものるむわかるる人もまちやきぬると

とほき人なるのもとけける人の日ならすへてひさのうへてまかりて

うちのねものへはれときはわかれちは雲井のまにかくれはかなきて

菅原のよしあき

天暦御時少弐命婦豊前にまかりける時大盤所にて餞せさせ給ふにかつけ物たまふとて

御製

夏衣たちわかるへきこよひこそひとへにおしきおもひそひぬれ

題しらず

よみ人しらす

またしらぬよりわれはわかれにゆくすゑもの秋の夜はいまの人をこえ
播磨守にてのくたりける時まかりて物いひ侍ける君

あはれくまるも侍ひとの相坂よまりのもとにいて侍ける

よしのよ

かへりのもとけける

ゆくゑの命もしらぬ別ちはけふあふさかやかきりなるらん

大江為基参河守にて侍りける人のもとへくたりけるにあふき
つかはすとて

赤染衛門

惜むともなき物ゆへにしかすかの渡ときけはたゝならぬかな

源よりすけか参河の守にて侍りけるを
とふらはれてつかはしける

よろこひにゆきみのやけしかりけれはや思ふらん
つねよりもうれしきものはくたりても侍なかむらむ
ひくて侍て

源兼長

別にはあまたもしらぬ紀

しらぬくさまくらたひ人のゆくへのいつらもしらむ

つらゆき

唐けはおもひもさしまたれ山のはになとかはむかしのこのもとや君

共政朝臣肥後守にてくたり侍けるに妻に装束給ふとて

天暦御製

けふの装心をそへてやるからにまたもてかへれたつかきしくれは

天暦御時御めのと肥後守にてくたりけるに

おもふことなきてもゆくみちのかなしきはたゝかくれぬる

なきまつはらにさくこれはあやけら

帰るさを海路につとふそのたのしみわかつ夜の衣手は越かしてあふまでを

かすみの浦のほとりなる時　つくしにて

舟ながら袖のなくにわかれの心はありくもなくはかなきわかれ

みちのくにはべりける人のもとへまかるとてもふことに　弾正尹

ちぎりおきしことのやくそくはしけるかな

戒秀法師

このたびにいくすまれこそあふさかのすぎもむかしのたびもわすれね

藤原いまのきみて豊前守に侍りける時たびたまへる

梓川のうへにとて くだりにも侍りけるにしはすのはてにまかりける

しはへて

藤原清正

思ふ人あらんゆくわかれぢをしたふむかひの流れはあさからん

肥後守にて清原元輔くだり侍りけるに源満中

餞し侍りけるにかはらけとりて

もとすけ

いかばかりおもふらんとかおもふらんおいてわかるゝとほきわかれを

源満中朝臣

君はよし行末遠しとまる身のまつほどいかゞあらんとすらん

題しらず

読人しらず

なくれかてたつのおもひを見れは白雲のたちへだつらんやゝせん

右衛門

源兼澄女

命とそいかにしもとは思ふにしいきてたまのをまてこそおもひしれ

ゆくへ（西）のをきける人のもとにいひつかはしける

橘倚平

若ゝしいきたれ松とらむとはすれと人もおもはさらなくよ

陸奥守にてくたり侍りける時三条太政大臣餞し侍りしによみ侍りける

藤原為頼

なけくきものは松坂山をやすくこえん君のちとせのまたなかれて

みちのくにの白河の関こえ侍りけるに

平兼盛

たよりあらはいかて宮こへつけやらむけふ白河の関はこえぬと

實方朝臣みちのくにへくたり侍りけるに下くらつかはすとて

右衛門督信

あつまちの木の下くらくなりゆかは宮この月をこひさらめやは

題しらす

よみ人しらす

なれゆくはうき世なれはやすまのあまのしほやき衣まとほなるらん

恒徳公家の障子に

かねもり

しかりするはしのにとまりする人やまなほにかゝる露をみるらん

なさけあるしものかなしさかてをまてなかめて

つらゆき

雨ふれとまみのゝ玉そめけれは名にはくれなゐのそみなそ有へく
なにはにはまくへし海てさりもゝへまとけるあかつき
ふりまれ侍ほとに秋この有る侍ほかきて
伊勢
秋ならてすゝおとをききは紅葉の枕をいはゆるまとける
拂へ海のまとけるみちまてのまれなくかきて
[illegible]
紅葉我やとにありもちたるをはるの我もまそふる渡有る
題しらす
よみ人しらす
君ならはきつつまれと紅葉露しまうしわかの風もよせ
源工負の大隅人まつのうらくたまきろふをきれたれ
院にて月のあかゝりけるにわかれをしみ侍て
平兼盛
まれにあふ我ものをもとくれにすゝやまの秋の夜月
秋なれは海のまとけるにいすみのやまにて
[illegible]
なみ有へ我やとをみのいつもいはもうそ錦すれ
川へくまとけるみちにて
重之
ふるさとに紅葉の枕むすふねにおもつゝうこそゆめもみくされ

帥伊周筑紫へまかりけるにかはしりはなれ侍けるによみ侍ける

ゆきなりすけ紀

思ひ出でもなき故郷の山なれとかくれゆくはたあはれなりけり

なかされ侍りてのちいひおこせて侍ける

贈太政大臣 菅

君かすむやとのこすゑをゆく／＼もかくるゝまてにかへりみしや

このきれのうたは[illegible]

なかうたによみて侍るをし

かたり

金吾 仁明天皇御時人也 承和四年九月十五日高陵ニ終

浪のうへにみえしこしまのしまかくれゆくそらもなしきみにわかれて

かきのもとの人まろ

万

あまのとふやのさかれ川のしらなみのいなしの色あれにやこにおもひてやすむ

人丸 人麿事世ニ言見人但上古事 六十餘年

拾遺和歌集春第七

物名

紅梅

山のうた

もみちはに衣はしみにそめわ秋の山かへりこえくれはゆふ

うやくき

中上
なかさやくきれもたなかふてあやしくもれ名にそあるへき

川くみ　　大伴黒主

尚
わか心あやしくあかね春くれはもにいくみそあふてなへしん

李房
さくらにはものいくられありあまりにふかくいろもしらず

川もくうた　　もよみ

なにはくうたにつきてかはいく都の風のさそふる雲かな

まそうの　　まとすき

みすれはわかかはしんたまてもこのはちのもみてはちるわれは

さけのよみ　　もよみ

われきねはまつのまちにありきろのやまのねにはなかれし

火かしのあゆ

雲ゐよりおちくる川のみなかみはなかれてたきのもと有らん

なしあゆ

もしぬれはこゝろのまゝにたゆるをはいかにたえなむ

川くこやうた

中上
わ春にの武蔵のかたふたつのいけのつゝや君はむかし

いろいろ　　たまゆら

四十九日　ちさとみ

拾上

秋風のよもの山よりをのかしゝふくにちりぬるもみちかなしな

拾遺和歌集巻第八

雑上

月を見侍て　中務卿具平親王

拾下

世にふれは物思ふとしもなけれとも月にいくたひなかめしつらん

清慎公家屛風　つらゆき

拾

ねよかしと有さいふにかしましき月のこゝろはねられぬものを

此にをとく帰て侍けるころ月をみ侍て　大江為基

拾

なかむるに物思ふことのなくさむは月はうき世のほかよりやゆく

法師にならむと思ひ侍ける頃月を見侍て

同
うく拝へのあくるの安芸にすむ山しくもとかく霞ける
藤原ためみれ

冷泉院乃東宮におはしましける時月を待心の
うたをのこともよみ侍けるに

同
ありあけの月のひかりをまつほとにわか世のいたくふけにけるかな
藤原仲文

参議玄上か女の月あかき夜よりくれ人とまかりて侍
うちにはさふらはれ
伊勢

同
くもゐにてあひかたらはぬ月たにもわかやとすきてゆく時はなし

比山にこもりて侍りけるに人の月のあかき夜もとし侍りけれは
寺にもなれは
恵慶法師

同撰
こゝら月のこゑまさにかくしては北山にこもる

屏風の絵に
つらゆき

同
いねかてにまもりてありあけの山の紅葉を見てかは月を

元輔

同
久方のあまつそらなる月なれといつれの水にかけやとるらん

廣義五條院にとみ侍りける時斎宮のみこにわかれて侍りける人
ありかて秋の月といふ題をよみ侍りける
右大将済時

こゝにたにやとる月あかにすむ人の宿となれやすみかく流るらん

式部大輔文時

春下
水のおもに月の流とみえつるはちれしかなやにかはれぞせし

除目のあしたに命婦左近かもとにつかはしける

同
年ごとにたえぬ涙やつもりつついとゞふかくは身を志づむらん

円融院御時御屏風哥奉てなかれの
かへて奉てなかれける

よしのぶ

かけもなく泉のうちに志つむともいつのいつみ川流れに紀ゝけるか

権中納言敦忠の西坂もとの山庄の滝のいはにかき
つけ侍りける

伊勢

春下
おとは川せき入ておとす滝つせに人の心の見えもするかな

中務

同
岩のくゞるやとにまちをとめ尋ぬれは志はしはへて流れぬ袖はあらなん

題しらず

つらゆき

同
なかれくる滝の糸こそたえすしていくらの玉のかすもとゝめかねらん

延喜十三年斉院の御屏風の哥によませ給ける

流くる我身はいとこそよはけれしらみなれて折ものたま

大覚寺に人〻あまたまかりけるにふるき滝を
よみ侍りける

右衛門督公任

笙竹の糸はなまてこゝしくなりしも程に名つゐのみのしるし松さこえそれ

題しらす　　元河ね

推下 いまは我ゆきのすゑくにの吹風の音はたえねともすみしみねは

野宮に斎宮（親子）の庚申志侍けるに松風入夜琴といふ

題をよみ侍ける　　斎宮女御

尚 こゑなすね松のうへすゑかよふらし浪の声にそ風もきゝける

尚 ことのねにみねの松風かよふらしいつれのをよりしらへそめけん

尚 松風のをとにこゝろのきえしかれは誰ゆゑ我はねさめかちこそすれ

天暦御時名ある所を御屏風にかゝせて侍る所

をきてみるをそれなる小松かきこゆ

忠見

尚 松のへなりの松のこゑはきゝつらむありしき浪の声にそ風をきゝける

延喜御時御屏風に

つらゆき

尚 雨ふると吹松風はきこゆれと池のみきはゝまさらさりけり

尚 [illegible]御時大井に行幸ありて人々に歌よませさせ

給けるに

推上 大井河のまへの松にことゝはむかゝる御幸や有しむかしも

住吉にまうてのかへりに陰時侍けるに舟人まてのりて

かくわてよみ侍ける

かくれなく絶ぬ渡川に住吉の松の下枝をあらふ川なれ

五条の内侍のかみの賀の屏風に松のかけにある所

まゐらする 兼盛

伊勢

花下

海にのみかゝるあしたの松の木のみとりはいそのはまのしらなみのたえん

ひぬ海のうきける人にねさ川のましろの春はきにけり

まれのさと侍て　　よみ人しらす

見あかしの浪にも霜おける住の浦の松にこゝろをよせて行む

題しらす　　よみ人しらす

立かへる松原こすゑもあひのおとにきこえしまつのしろしき人やまつ

おもひのままにかみなる人もちれなくてもまつらしけれは

よみ人しらす

いつてなき口のたかきのくてなおきくまれの松ともなしやゆく人はなき

河原院にて古松をよみ侍ける　　源道済

ゆくすゑのしるしはかりにのこるへき松さへいたくおいにけるかな

題しらす　　よみ人しらす

昔住吉としもなかりけりなにはなるきしに我身へかへん

川のさたまりけるとしてあらためたる人のとし

うらを読みたくみの川をおもひける

つらゆき

拾下
いたづらに世にふる物と高砂の松も我をや友と見るらん
あのしれぬ…船…まて闇のまよひけるかな
源為憲

拾下
世をうみにありしれし松も浪…こそ…

題しらす
よみ人しらす

同
…今…花…のまよひの…

山寺に…ける暁に…
右大将済時

拾下
あ…こそ…人の…

天暦御時御屏風の絵に…
…

藤原…

同
あ…
大江為基

よみ人しらす

拾
…浪の…人の…

古
まちかねてよはゝ雲にみえすとも我そゆく月の廻あひみまて

題しらす　つらゆき

古
てる月はあきしもことにさやけきはちるもみち葉をよるもみよとか

清慎公月林寺にまかりけるにおくれてまうてきて
よみ侍ける　藤原後生

為我折し桂のこし月なれやしれぬにいつるねは

菅原大臣かうふりし侍ける夜母のよみ侍る

拾下
久方の月のかつらもおるはかり家の風をもふかせてしかな

題しらす　人まろ

古今
万
月草に衣はすらむあさつゆにぬれてのゝちはうつろひぬとも

ちゝはゝに人はいふともとまりてさむわかまもる朝にしるさあさしね

万
衾なきなかにはきぬあやしくもわか衣手のいかにかは見ゆ

白浪はたてと衣にかゝらなくあしたもすゝしたれかうらく

そうてへ川のきしにてけるときによめる

万
いなをれは夜寒にしまさをかさねてる衣ゆきてやきむ

なかされ侍けるみちにてよみ侍ける

贈太政大臣　菅

あすゆける道をやましもしらすかすつゆにも我かゆくへ
たえ木さへいよ巴残

なかれ木もゝかゝをあはてはあれてもは母なれはこそうつりけるかな

いのちさへしりて侍ける時すみける家の柱にかきつけ侍り
ける

平定文

うき世にはかとさせりとも見えなくになとか我身のいてかてにする

中宮長恨歌の御屏風に

伊勢

木にもおひす羽もならへてなにしかも浪路へたてゝ君をきくらん

大津の宮のあれて侍けるを見て

人まろ

さゝなみやあふみの宮は名のみして霞たなひき宮木もりなし

やましなにて侍けるに手習にかきつけて

よしの梅

曙のねさめの手習たゝすきのはしにとまりける
地（あ）の世のなか（あ）のはかなさをしらすして
あさちかたらちかねとしまへる歳はまさかれ神もさへつけゐる
まつ川をみちかすてこしの山をも越て

よみ人しらす

こしの山越たるになれといひけるしるしをかけてゆきし
對馬守をしはらく過けるひとの侍る時
かのもとにいひける朝臣の妻のよみて川のきしにける

たなし川せまの雲たちのほりなけきもりの人もみえなくにつゝある

詠天

人まろ

万 天の海に雲の浪たち月の船星の林にこきかくるみゆ

よみ人しらす

万 河のせにたつ川なくらしかま月のみちしほみえわたるかいの舟のも

山とよみ哉

万 なる神のおとにのみきゝてまきむくのひはらの山をけふみつるかな

詠葉

万 いにしへにありけん人もわかことやみわのひはらにかさしおりけん

鮮し演

川しゆ紀

人志神すこしも思ひ出にさきのよしなれにもかけいたしつく

伊勢ちん三ほ紀は海のもとにまて

万 おとの海のあゆのうらにはしらなみのたちかへりてもみつるしほ

人まろ

天暦十一年九月十五日斎宮くたり侍けるに

内よりすゝりてうしてたまはすとて

御製

思ふことなるといふなるすゝかの山こえてうれしきさかひとそきく

規子 天延三年為斎宮 天暦十二年生

円融院御時斎宮くたり侍けるに母の前斎宮もろともに

徽子 式部卿重明女

こえ侍て

斎宮女御

肖上
世にふれは又をおくらすすゑの山をすてゝはまのかゝるものから
あさからぬ契を結ひにしも時よりそある

人まろ

万
あさちふの志のしのまあしをの海をは有るるまてわすれぬをかゝるまし

小一条左大臣（師尹）身まかりてのちかの家に侍りける鶴のなきけるをきゝて

小野宮太政大臣

肖下
おくれゐてなくなるよりはあしたつのなとかよはひをゆつらさりけん

右大臣のいちこのきみ右大臣（雅信）のむこになりてのち
なき人の川のそこにしつみてかなしこきて侍りけれは

年をへてまちありし川のあゆ川はいかなる池のたかにあとをとめん

愛宮
九条右大臣第五女　母同高光
三君死去之後西宮左大臣室　少将

太貳國章むくしにまかりけるを侍けるをきゝて
かもとてぬし川のもとよりよみて侍りけれは

もとすけ

ゆくゑなき恩恵にもあはてやとて露のたまをもとむらし

題しらす

中務

すみてうる東陌の世の中に志つみけるを見ていきてはつけむと思ひしに
かなしみてせつなく侍りしかは東なる人のそこにありしをこそ
て侍りしかは

ゆきはてぬよし

露はおなし枝にむすふ君をこそやと思ひのわすれける

称明寺に道に云當所ますめて侍りけるに萩

を侍りけれは　　　　よしとも

考
折しもねいとちやさかりにねなむとこそはかれ根ゆかし人まて

二条右大臣左衛門佐伯清忠とて斎ともに

を侍りけるに此比むすふ侍りけるに参りよわせこころ

よてよみ侍りける

尚
限ある此波の川ゆむすはれて人の心ちはあれやあらまし

うらいし侍へきまそらなりしまち侍りて雪れふりける

なとこて　　　　よしとも

かの世にはいつくれまてさくら見るものをかならすもあるかな

いのちをあはれにまなはれてさくらもうつる此人のちかひをとこせる

考
すも出すなる見す

源景明

考
見し人は此世中にいのちしらはかへり見る人のかなしむやはは

題しらす　　　よみ人しらす

世中にあるものとそしりたまはとのちのあらたくさん

草そくいたしくれまてしいつもやなきにしむとするなり

花さく侍ひとる女をあちにかくれしさて花こそあれ

いのちもしけれ

いはしへのいそらぬあくしくれかのあとにわかるれはさまにはせむとくれ折に

拾遺和歌集巻第九

雑下

あるところに春秋いつれかまさるとゝはせ給けるによみてたてまつりける

紀貫之

春下
春秋に思ひみたれてわきかねつ時につけつゝうつる心は

元良のみこ承香殿のとしこに春秋いつれかまさるとゝひ侍けれは秋もをかしう侍りといひけれはおもしろきさくらを是はいかゝといひて侍けれは

おほかたの秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなし

題しらす　よみ人しらす

春はたゝ花のひとへにさくはかり物のあはれは秋そまされる

円融院のうへうくひすとほとゝきすといつれかまさるとゝはせ給けれは

大納言朝光

折からはいつれともなき鳥の音もいかゝさためむ時ならぬ身は

みつねかもとへみせにつかはしける

参議伊衡

春上
白露は上よりをくをいかなれは萩の下葉のまつもみつらん

返し　みつね

春上
さをしかのしからみふする秋萩は下葉や上になりかへるらん

此宿やあるしなくなりにしかは花見に人々あつまりて
よき合し侍りける所に　この詞ハ貫之集にあり
恵慶法師
春下
すまねともてなれし梅ハたれにまかせてかとにほふらむ
なすらくもれはちりにけるかな
あさねのよしなり
冬
わかれにしそのいにしへのむかし松ちとせをまつさかえ
題しらに
読人しらに
華山のこてふにとむ人やわかれこともなかりけり
健守法師佳名むかしにてそのまゝにて給ひける
とはいにしへの野のもしけり
源経房朝臣
山里ハねやもみのあまりにさひしく人の野にもまれなるもありけるかな
冬
山ざとも野梅もなくて心ころ経て人もなし
屏風に清涼殿の前よりのうへにて題有る所
右大将道綱母
春
あま川海あまれる花をさなくなりにたへてもうれしき
内にも人の家に侍るか紅梅かさされたるに
これはよくよりて侍るかれハ家あるまじれ女まかりて

ありきさき殿御哥合に
勅なれはいともかしこし當年やとはゝいかゝこたへむ
うくひすをさせられはかゝすすしよみも
あるところにて侍けるに侍らさりけれは
おもて侍ける人にすゝめしてかへりもとめさせ
いひ侍られは
貧しく家にすみ侍けるをとふ人もなかりけれは物思ふ事侍ける　又
寿玄法師
月をみて
よのなか
梓弓まゆみの山のはをいてゝ月のさしてたのまん
うちもねすまちいてゝ侍るはこれさへまちてまたるゝく

わすれいそなくなきてきてといふことをそ侍られは
伊勢
我しめしその君はみのかはの水あさくやみなれは我ならは
能宣に車のしりかひこひにつかはして侍けるに
はらすといひて侍けれは
藤原仲文
鹿をさして馬といふ人ありけれはかもをもをしと思ふなりけり
又
よみ人しらす
なきこといはれしものをやめしにこそやむかしはわすれ
應義之家のみなみのあたりのあれたる所にすみ侍れは
秋なれはものゝあはれも
恵慶法師

尚

なにはえにあしのまろねのしけれはしけれはにはのくにのよしもよもそ者

川のみにゆかしくのよにてよみゆけり

すみ

難波のたえかあみたかさみの世にありしとき兼輔はまし

川のくすの浦のなけかけるにや志かきあらん人にいはれ侍て

宮にいもみまかれてかはりのくすれ住吉を見くさまにいとゞ

なにのまくへしにありし女のもとにありけれはまうし

まし侍けるに是こそありつゝそあやしきまする

ゆすてみちにありさて侍るかにきもとめたまへて申し

こあまをしいかすなしいかのもしあやしくれはれさ

のよのみ侍ける

君なくてありつるよさの思ふにはいさらなにはの浦のすみかは

ぬし

わかれにしよのすもとてかれ／＼なるにつなすみは浦のすみすさ

伊勢わかやれ所にてもとてよりもかなしみこそすれ

もはけりつゝ見るまもけり思ひもかれ

いまはてんの安部の方にいはれしめもとられしこれは思ふ人

御息所事
定信見話多
皆門村上
藤原兼茂
明女也
李方藤原
兼茂か女
歌主女

もとて

兼茂かやれきみ

近衛御時
藤原兼茂
丁勘

なき人のかすみを思ひあやかれは思ひそも袖のぬれてもあわれ

地獄のゆかさるるよとみて

いつゝをハ渡らさりともありぬへし夜なかきさてくらへん
菅原道雅女
おなし秋はしすかにとくれて侍けるにもまことのさゝれ
春秋ハ来の侍りけるにてさゝこれとゝもに
つもしゝ侍れハ　皇太后宮権大夫国章
拾下
をくしこそ春もしのはれぬれ秋はしけれ秋のとゝもなき
源重之の母の近江にまかりけるにこにこ
よもよろれハまもていそく事侍てここれあいあまて行
かれぬるをとこハいひて侍れハとハいひ女かみ侍る
拾下
おやハおやとハまつしうハいひてまかりこしいにあはれし

題しらす　人丸
万葉
山高み夕日かくれぬあさちはら後みむためにしめゆはましを
貫之
拾下
名をきゝて山ハ三笠もありけるをあさひさすかにさしなりけり
よみ人しらす
なかれてもありけるものをみてしに梅津河原をわたれハありけれ
名にハ又えそうくかりけるいとゝに渡れハわれ
雨ふれハあやしくなれるさはのはをしほのおもしろく
きゝあやまりハ　恵慶法師
拾下
雲ふかくあやしきものは雨ふれと大原河のわたりなりけり

うつりにけりやまさる哉とて

仲文

河御いさゝかにとふにあるかたはらにあれのあまたあへる人まかせん

天暦御時一条摂政蔵人頭にて侍りけるにおもしろきとの
御前にあそひしけるを御覧してまつりてはれのはしに
くらゐにおほれはまれなりとてはまれ人とて

御製

しら浪のうちやかへすとまつほとに浜のまさこのかすそつもれる

内侍馬の家に右大将実資かすみ侍りける時
おほちかふゆふ浪のよるはまされはねまちしとのを

契りして待けれは忘人ゐて

小野宮太政大臣

いにしへのことあるてふこれはその中にまたれしありしといはまほしかれ

返し

さきたてしをりかゝるはやまさしかまきれたるはかくなれはことに

題しらず　　よみ人しらず

あすかゝはきしをやくらんいまはたゝまさにさかへしやなと

清原元輔肥後守に侍りける時かの国のしらかは
といふ所に人々まうてけるにうたやなと
を清河のかたはらにみつくみける

かたふきて川くちにやとるしらなみのはてゝ山河のなかれゆくらん

三位国章ちひさきうりを扇におきて藤原かねのりにもたせて大納言朝光の兵衛佐に侍りけるときにつかはしたりけれは

かたはらにさくなみにおもひけれはこゝろのうちをあふくなる

返し

ちとせふくなつにほかれのはてもあらやかすみにほひけれ

とられぬるこゝのはなをいは所に年へくらしいとうりをあふきのうへにおきてこそいろかはのつかさ

このたひは

若干
みちのくのあたちのはらのくろつかにおにこもれりときくはまことか

恵慶法師の家にてみちのくにまかりける所

藤原為頼

尚
わかき人のなかれあはれ山のいはまにかくれてすみのまれなるをやなかん

尚
なき名のみたつの市とはさわけともいさまた人をうるよしもなし

志けゆくのきは川ふるて海こそのたちし川のもしたもふれ

八条にまかりてよみ

尚
なき名のみたかをの山といひたつる君はあたこのみねにやあるらん

さけ川の年をへてまかりて侍て

拾
いはへもわかやましの山やまのわたりさよふかしすむ人

日ら老

大隅守さくらしまの忠信か国に侍りける時こほり
川のつかさにかしらしろき翁の侍りけるをめしかむかへむとし
侍りける時よみ侍ける

拾
おいはてゝ雪の山をはいたゝけとしもとみるにそ身はひえにける

この哥によりてゆるされ侍りにけり

旋頭哥

ますかゝみそこなるかけにむかひゐてみる時にこそ
しらぬおきなにあふこゝちすれ

柿本人まろ

万
ますらをのみことかしこみいもにあひきもいかなるかなよ
なかなかにおもひしに志ほかせにつゝたゝ
うれしさのかみのきるきぬとこよりそまつりつゝも
きみのきる海をむらさき海くさふかきも
女のにみ海のかせあをしまをかにさくいはまにうつれは
わかあし

源のよしあきら

あはれみたれのましのふしていちしれぬまくさねかく
ふきならすはるのふもとのかけける
なみのうへぬ

すゝ宮にまうてゝ海川おさめ

人まろ

万葉 やまとして

ちはやふる わかきよさゝれ きさしけた あれし志なたる

菜のはも すみれけ谷を やまのもれ とすみうちと

天こゝ旅 よすかくもの ちりまつのと 秋川の流に

宮しらし ふゆ絶まて なかしきれ 大宮人ゝ

ふねなへく あさ海ちわ ふねなへく ゆふはわかれ

おゝ河の なかふなく こゝのこ山もれ いやなきらし

なつ山の河の なつ絹ひやふ 見れとあかねも

反哥

見れとあかねすゝしくのまれ有のはても なかれの時なくかへりみし

我ね志れみなれて残すら絹て 勘解由判官にて

源志あつ梅

あしなみの まれなきに なつさむし きさいのやまのれ

やまのきしこ 風もきつね ゆふこゝも ふあふいなし

あさ絹ふ 心も地しふ まとれ有処 こ有しおあふ

なかちしわ 物知ふしとれ まめしおみ みあへ都川れ

よすかと絹て 友いみきふふ もとしまぬ海 かたあらと袖ふ

はろいえ川く 名いまれりと みくまのひ これをりゆは

ふもち川まる 雲地あまとに あ流絶つく ふみてふす

道ある哉　なれぬる身をと　有られ無　あらもうけむも
あれれもよ　志あらむ人に　しられぬけれ　なれてなれぬの
きみ松に　なくなれぬなを　こしのなれ　くもれぬ人まて
うくれなみ　なつの紀ゆく　うらしあれて　いとなりらん
人もある哉　うきの紀たに　こ川しかれ　世にいらしくて
もみのうれ　松はあらう　たいねまを　みちのはれとも
ねきもらん　またいつも　志つなみの　なみちいさく
ゆきのよれ　ゆきとわたりに　なりもぬける　霧のまれなし
きみ志らは　あれいまなに　志流のしも　あまねかなたは
うらもとて　いくとも紀の　かしはかなし

恋し　よ志のよ

世の中哉　にほひくる　ますられぬ　こともせずるゝす
なれもみな　松にふる山の　松のうらを　うつろふく
もろもの紀の　ちよもやちよ　流の流しと　なつの紀なれ哉
うくれぬれ　志あれねなれ　あやゆくゑ　あやなぬ紀も
人なみ川　うきにこゝを　松はえぬ　よるのゆ紀を
きみもしも　みこはさの河を　夜やことも　くもれぬなみと
あふ川の　いつよとや紀　いきなれ　風のうつ哉
松ある小　世のなから　川ゆぬれ　へまん袖の
よのみちを　いのちをかな　いまはなき　あいしなれは

天元元年 貞元三年 六月廿二日[illegible]八月詮子入内十一月女御三年六月一日皇子誕生
天元元年十月二日任右大臣同日叙二位同二年三月正二位
永観二年八月立第一皇子懐仁親王為皇太子
寛和二年六月廿三日太子践祚摂政七月叙一位准三宮列三公上
永祚元年太政大臣二年五月出家七月薨六十二

拾遺和歌集巻第十

神楽哥

さかきはにゆふしてかけてたかよにか神のみまへにいはひそめけん

榊の葉のかをかくはしみとめくれはやそうち人そまとゐせりける

みてくらにならましものをすへかみの御てにとられてなつさはましを

みてくらはわかにはあらすあめにますとよをかひめの宮のみてくら

おく山にをのゝえきこゆなれは山人のちとせをいはひてきれるつゑ

よるも山人の[illegible]神の[illegible]

いつれ神よるや[illegible]宮ちのよりん

銀のめぬきのたちをさけはきてならのみやこをねるはたかこそ

たかしまやかしくの原のみやこまてきこえ高きみなもとのとも人く
はなれやとこそしよみ侍ける

僧都實因

秋きりのたちしくれの杜の下葉まてちりにし色もあやなくそさけ

恒徳公家障子

源兼澄

たまよるこれそあひいくよになりぬらん神さひにける浦の松

粟田右大臣家の障子に小くらやまとて秋しか侍

小倉山いくのさとのかよふ所

平祐挙

紅葉ちるまつのきみにかなひては神のしめなはかけても

題しらす

人まろ

万 ちはやふる神のたもてるいのちをはたかためにかもなかくほしけん

千早振神も思ひのあるなれはこの山をもゆくらん

安和元年大嘗會風俗あふつ山

大中臣能宣

君か世はかきりもあらしなかの山のまつのかわらぬためしなりけり

きくなみのなかれの山のなかくのみあはれなるかな君かみよは

いはくら山

よみ人しらす

すへらきのいはくら山に君か世をとこのうへにそ見つらん

みわの山

よしのふ

みかの原山　よしれ梅

いつしかもみかの原山のけしきあれはちとせをかねてかそふへいつらん

いはくら山

よろつよもいはくら山に宗はしらたてゝつかへんたえしいはむとそ思ふ

うつみ山　中務

百敷をあつらうけくらむうみ山ちとせをいのるはちつかきくもなし

いはくにのさと　このねもとし

としものゝおりなかたなはくにのさとあれはしくたかはなかはや

よしなきさと　能宣

名にしおはゝよしなきさとのあれはゆけはなにゝくもいるさしこゝろしなし

いつみ河

泉河のとゝろきはのこゝろなきいかてしはりけるすみのさわるらん

かはせのさと

いつみのとしいふはらのさきをくはいるすくにあるみやこゝいふる

延喜御時八月廿日民部卿清貫の六十賀中納言懐信奉れる時の屏風にかけるうた

つらゆき

葉月の山かさの紀はとしのすつかきのさかのゝ歌のさそれ

すみけるてよのみやこらん

人丸

おほかたはすくるみ神の川くれは昧背なかところなれし 小御詠

延喜女年亭子院のうへに御幸侍るに
九宮女一首奇りて奉てまいりかよひに

藤原忠房 延長六年廿二年任大和守 廿年卒十月

かくれぬのそこのそれやとほむ神ゆきさ声のいとすや

拾遺和歌集巻第十一

恋一

天暦御時歌合　壬生忠見

恋すてふわか名はまたき立にけり人しれすこそおもひそめしか

平兼盛

しのふれと色にいてにけりわか恋は物や思ふと人のとふまて

題しらす　貫之

ろかしらぬ川の許にはなすてましたりし心は志れ人のありき

あかしらしかもしみて川のもしけり

平公誠

しのふるを涙にすかる物思はまなかなかに君にしらるらん

題しらす　読人しらす

なき名のみたかをの山といひたつる君はあたこのみねにやあるらん

あしひきの山したしけきなつくさのふかくも人のおもほゆるかな

なきさ(?)ふく人に心はつくしきの君にもあるらん

人まろ

あまくものやへくもかくれなる神のおとにのみやはききわたるへき

よみ人しらす

わか人のおいけさやまうちわたしつつしゐても見まほしきかな

夢にのみ恋しき人をあひ見てはさむるうつつはわひしかりけり

かくてのみありその浦の濱千鳥よそになきつゝこひやわたらん　人丸十

万 よそにのみ見てややみなん紀のとなし川もそのいはにいてとゝ

海きゝつゝのしすゑにいひはしめ侍従に侍ける時

権中納言敦忠

かれこれ[illegible]心のうちにものいひてねさゝれ

侍従に侍ける時女にものしてはへりける

くにゝ海き

いてのはしつるをきものさき人忘れすにはかに心のいろかはりてとゝ

拾 いかにしてかく思ふてふ事をたに人つてならて君にしらせん

権中納言敦忠

川とこれ中納言これやと所々見て川のもとにけり

桑子 醍醐天皇更衣 章明親王母

小野宮太政大臣

あさましくも川中に人をとゝめおきてあさましきかな人をとしもへぬらん

女

なかくて雁しとはかりに心は水のあさましかるらん人のあはれなるをしれ

題しらす

よみ人しらす

これは川のあさましくもよそにたにこひしき物とあさ人は心やわらん

大井河くたすいかたのみなれさをみなれぬ人もこひしかりけり

人まろ

万 さゝの葉はみ山もさやにみたるなりわれは思ひのわかれきぬれは

讀人しらず

なきなのみたつたの川をわたりしと人しれすいはまかくれて[illegible]

君をおもひおもはぬ人をおもひつゝ[illegible]

世の中はむかしよりやは[illegible]

題しらず

やすらはて[illegible]

葦引の山したとよみ行水の時そともなくおもひわたるかな

いのちにて[illegible]

[illegible]

いまはとて[illegible]

[illegible]

九条右大臣

[illegible]

よみ人しらず

[illegible]神無月[illegible]

[illegible]

中務

[illegible]

かきもなくきえぬる雪ハかりかりにたちかへりてそあはれ思ハめ

題しらす　　読人しらす

よそなりしあはれこゝろにおもひしかおもひのひとやあひていひちらさん

いりえてわかおもひやまむらやかたあさ海のあひのなかきゆくも

大原野祭の日さかきにさして女のもとにつかはすとて

一条摂政

おもはれぬ神もしるらんわかおもひは千代氏人のあるやとおもへん

返し　　よみ人しらす

さか木葉の春さす枝のあまたあれはとかむる神もあらしとそ思

題しらす

あせん川ちれぬ神をしなん君かこゝろのかはるなけれは

海もあさし山もひきゝにかよふこゝろとなりぬへしむかしの人の

人まろ

おく山のいはかきぬまのみこもりにこひやわたらんあふよしをなみ

大嘗会の御禊に物見侍りける所にわらはの侍りけるを

見てまたの日つかはしける

寛祐法師　[illegible]

あまたみしとよのみそきのもろ人の君しも物をおもはするかな

題しらす　　よみ人しらす

せきとめぬなみたなかるゝ人をみてこそしらるゝかにあはれのほとも

人しれぬ涙に袖はくちにけりあふよもあらハなにゝつゝまん

返し

君ハたゝ袖はかりをやくたすらんあふにハ身をもかふとこそきけ

題しらす

人しれぬ我か涙ハ川なれやいくよになかれて袖のくちぬる

思ふとハ君にみゆらむ大かたの人にしられぬ物おもふ人

天暦御時哥合に　中納言朝忠

あふことのたえてしなくハ中々に人をも身をもうらみさらまし

題しらす　よみ人しらす

あふことハたゝいつはりのよひ〳〵にことのはかりそ月にみえける

よみ人しらす

あふ事をなかき月日にそへて待時ハさらにいまこそくるしかりけれ

あふまてのいのちもかなとおもひしを君かときはの山の松そくるしき

いつとたにあふみのみきのさしもしる我やなかすにあはで思はせん

つらゆき

ゆくとまる川のなかれにもえつゝ年まつ月のなけきそふらん

よみ人しらす

いきたれハまされるつらさおもふ恋といのちとあふこともなし

大伴百世

万　こひしなむのちハなにゝかせんいけるひのためこそ人ハみまくほしけれ

源経基

あちれしたゝす君かよにいまはおほしいてゝあはれいとゝくるしけつゝなくよ
わきもしらぬ世の家の人数ならてはいとゝ嫁けり

よみ人しらす

人まちしかは心とゝめて見つゝいくよかくれ君のやとはすらん

題しらす

忘れにもあらて君にあふ年月にあふにも袖はぬれつゝそ
ちきりしことのわかれにける世に流れもしけり

菅原輔昭

いはぬまにわかぬれかちに思ひする袖のなきてわかれなるこそすれ

よみ人しらす

露はわれなれもしつこともなき袖ぬれや思ひのやまのやまを思ひそらん

題しらす

なかれてもなきぬれもしつとはやまの山の井のあさしこそわかなやな
みと あれはてゝしはしもかねる哀をみてぬる人ものにあはさらまし命は
みと いつてのちかは心のあはぬときはにはすくさ人すれしのかけり
みと まれいつてもきみなわかれてきけやわかなれきたるらん

人まろ

万 恋ひつゝもけふはくらしつ霞たつあすの春日をいかてくらさん
万 おもひいてもかひなきものをあしひきのやまのあらしにあひてそなき

君とのみ思ひしことも涙なかれてあさましとふにしあれはなり

よみ人しらす

拾遺和歌集巻第十二

恋二

題しらす　読人しらす

春の野にあさる雉の妻恋におのかありかを人にしれつゝ

なき名のみたつ田の山のあをつゝら又くる人もみえぬ所に

人麿

なき名のみたつの市とはさわけともいさまた人をうるよしもなし

よみ人しらす

なにすかいまはかれにし池の水わかくめの思物ハ無くてあれ

人まろ

竹の葉におきゐる露のまろひあひてぬるとはなしにたつわか名哉

よみ人しらす

あらさらむやわか名はあらて唐衣かたもなほさすきてやきぬれ

唐衣我はかりきつるにあらなくにしほれ川なかれはなれむ

源重之

松島のおしまのいそにあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか

よみ人しらす

思ふにはしのふることそまけにけるいろにはいてしとおもひしものを

わかたのむみのりのよし川のもしけ流

藤原忠房朝臣

君か名のたつにとかなき身なりせはおほよそ人になしてみましや

題しらす

よみ人しらす

はかなくもたのむ心をつくすかなこころにはすれぬものとはしらすや

夢をゆめとしりなはなにかなけかましうつゝになれはくるしかりけれ

権中納言敦忠

あひ見てののちの心にくらふれはむかしはものもおもはさりけり

坂上是則

あひ見てはなくさむやとそ思ひしになこりしもこそこひしかりけれ

よみ人しらす

あひ見すはこひしき事もなからましおとにそ人をきくへかりける

中上
十の恋は我か身にも有くるにはやものゝあはれなるをみしりて
もしすてゝ死なはらになるのちてあるはいつもしけれ
よしの梅

中上
あふことはまちし月日のほとよりもふるはなかれにくちはてぬれ
題しらす　つらゆき

拾遺
暁のなからましかは白露のおきてわひしき別せましや

中上
わすれても有ぬへくおもひしはちりしのちのもみちなるへき
人ものゝ

万
いにしへのたかつのくにの有しかとあかぬ君とそなれにける
読人しらす

拾遺
こひしさを何にたとへむ絶えはてゝあらはこそ君をみねは
葛木や我やはくめのはしつくりあけゆくかけは物をこそ思へ

亭子院乃五の君のもとにいひつかはしける
平行時
あさなゆふなに露をおきてもあかぬ夜のあくるわひしき夜半のね覚を

本院のしゝうの君につかはしける
大納言源清のり
小野川のながれてみ心をかはらぬ文のかきつくしけるや

題しらす
よみ人しらす

中上
いにしへのとくしれたるをいなかへるいくへの人もうらみけるかな

女のもとに海のほとりにて
大江為基
日のもとに梅[illegible]あらはれ[illegible]
題しらす　つらゆき
中上
月は花も[illegible]花も[illegible]
よみ人しらす
中上
うつゝにも夢にも人にあはぬ夜は[illegible]
暁のわかれも道はかはすれと[illegible]
君こふる涙のかゝる袖の上は心とけたるいやはねらるゝ
女に[illegible]
もしけれ
うち靡て有りし梅花の雪[illegible]
在原業平朝臣
女のもとにつかはしける
よし梅
中下
あさましとくやしとも[illegible]君[illegible]
よみ人しらす
中下
[illegible]露[illegible]
中下
[illegible]人の[illegible]心[illegible]
中下
[illegible]梅[illegible]人[illegible]
中下
[illegible]
天暦御時哥合に
忠見

源三位頼政

忠房のむすめ

大納言